

令和7年度第2回一関市社会教育委員会議 会議録

- 1 会議名 令和7年度第2回一関市社会教育委員会議
 - 2 開催日時 令和7年10月28日（火）午後2時から午後3時40分まで
 - 3 開催場所 一関市役所 大会議室B
 - 4 出席者
 - (1) 委員 菅原千夏委員、熊谷浩二委員、小岩孝朗委員、館澤敏子委員、
小島正明委員、熊谷繁弘委員、千葉喜代一委員、村上とも子委員、
吉田美和子委員、金森勝利委員、小山亜希子委員、白石理恵委員
※欠席者 鈴木道明委員、平野和彦委員、大石敦子委員、小野寺憲之委員、
佐藤寿幸委員、小野寺美枝子委員、三浦尚博委員、青柳さつき委員
 - (2) 事務局 時枝直樹教育長、小野寺愛人まちづくり推進部長、
藤倉忠光一関図書館長、氏家克典教育委員会事務局副参事兼文化財課長、
佐々木修路教育委員会事務局副参事兼一関市博物館次長、
平石剛まちづくり推進部次長兼スポーツ振興課長・社会教育主事、
小野寺和宏いきがづくり課長、
佐藤康隆いきがづくり課市民センター係長・社会教育主事、
阿部彰いきがづくり課主査、八重樫理央いきがづくり課主任主事
- 5 説明
 - (1) 一関市教育振興基本計画骨子案について
 - (2) 一関市立図書館振興計画素案について
 - (3) 社会教育の必要課題に対する共通取組について

6 公開、非公開の別 公開

7 傍聴者の数 なし

8 教育長挨拶

本日はご多忙のところ、当会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、皆様には、一関市の社会教育のみならず、教育全般や市政運営に対し、日頃より多方面からご支援を賜っておりますことに、改めて感謝申し上げます。

まず、最近の状況について申し上げます。市内のみならず県内、さらには全国的に、クマの出没による事故が懸念されております。昨日は巖美地区において痛ましい人身被害が発生し、市として対応を進めているところです。現在、巖美小学校・中学校においては、特に本寺地区の児童生徒の皆さんについて、登下校時の送迎やスクールバス利用に際し、停留所までの保護者送迎をお願いするなど、安全確保に努めております。また、

市としても社会教育施設や宿泊施設に対し、随時情報提供と注意喚起を行い、事故防止に取り組んでおります。当面、この状況が続くものと見込まれますので、皆様におかれましても、何かお気づきの点がありましたら情報提供をお願い申し上げます。

次に、市内小中学校では、10月を中心に学習発表会や文化祭が開催されております。一関小学校のみ、今週末の11月1日に開催予定です。

また、市の文化祭も開催され、まさに「文化の秋」を迎えているところです。直近では「みちのく二夜庵俳句大会」に出席し、小中学生の作品表彰や市民の皆様の取組を拝見しました。学校教育にとどまらず、市全体の文化活動が生涯学習として本当に素晴らしい取組であると感じております。

さて、7月23日に開催した第1回社会教育委員会議では、社会教育分野における教育委員会の事務事業等に関する点検評価を踏まえ、次期一関市教育振興基本計画の策定についてご説明いたしました。現在、これまでに3回の検討委員会を開催し、人口減少が大きな課題となる本市の教育の基本目標として、現時点では「郷土を誇り 自ら学び未来を拓く 一関のひとづくり」を提案し、検討を進めているところです。今後の議論により、表現が調整される可能性もあります。

この基本目標には、社会の変化が一層激しくなると予想される中、市民一人一人が課題を主体的に解決し、未来を切り拓いていく力を育むという思いを込めています。未来を担う子ども達だけでなく、市民の皆様が郷土一関や自らの地域に愛着を持ち、それぞれの立場から社会に貢献し、自他の幸せを感じながらまちづくりを進めていくことが重要であると考えております。また、社会の変化がどれほど大きくとも、教育の本質である「ひとづくり」は不変であるという認識のもと、計画策定を進めております。社会教育における人づくりについては、「ともに学び、まちと地域をつくるひとづくり」を基本方向として掲げ、計画に反映しているところです。

本日は、次期一関市教育振興基本計画の骨子案のうち、社会教育に関わる部分についてご説明申し上げます。

併せて、基本計画と関連する「一関市立図書館振興計画（素案）」についてもご説明いたします。現行計画は今年度で終了するため、教育振興基本計画を上位計画として、令和8年度からの新たな10年間の計画を策定中です。図書館が地域の人材を生かした学びの場を提供し、まちぐるみの先進的な取組みを推進するためにも、読書を通じた好循環を創出していくことが重要であると考えております。

さらに、令和8年度の社会教育における必要課題への共通取組についてもご説明いたします。令和4年度から、市全体で共通テーマを設定して取り組んでおり、来年度のテーマについても併せてご説明いたします。

本日は、委員の皆様から幅広い視点でご意見を頂戴し、より充実した計画となるようどうぞよろしく願いいたします。

9 説明

(1) 一関市教育振興基本計画骨子案について

資料1に基づき事務局から説明を行った。質疑等なし。

(2) 一関市立図書館振興計画素案について

資料2に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 先ほどの教育振興基本計画18ページ、読書活動推進の基本政策2-5の個別施策に「不読率の減少」という言葉がある。この不読率が現在どの程度の数値で、今後どのように改善していくのか、計画の中では具体的な説明がなかったため、教えていただきたい。

事務局 令和6年度の岩手県の子どもの読書状況調査の数値を用いている。正確には「不読者率」という指標で、回答者のうち「今まで本を読んだことがある」と答えた割合を100から引いたもの。本を読んだことがある小学5年生が98.7%で、不読者率は1.3%である。全国と比較すると良い数値だが、わずかとはいえ本を読まない児童がいるのは課題である。中学生、高校生になると不読者率が上昇する傾向があり、特に時間的制約などから読書に親しむ機会が減っていることが課題である。

この計画では、例えば中学校においてデジタル読書の活用や家庭での読書習慣づくりなどを検討している。

委員 中学校もそれほど低いわけではないのか。

事務局 中学2年生では、読書している生徒が95.7%で、不読者率は4.3%である。しかし高校生になると、読書している割合が60.7%まで下がり、不読者率は39.3%となる。年齢が上がるにつれて読書離れが進むことが、図書館としての課題である。

委員 日本では学校を卒業すると勉強しなくなるという話も聞く。社会に出てからも学び続ける姿勢を持つことが重要で、その大きな役割を担うのが図書館ではないかと思っている。

事務局 そのような傾向は承知しており、ユネスコをはじめ各機関でも読書推進の宣言が出されている。知りたいと思ったときに、身近に本がある環境が重要で、デジタル化も含め、図書館の役割は大きいと考えている。一関市には約100万冊の蔵書があり、市内で自由に配送できる体制も整っている。図書館を利用したことがない方にも、ぜひこの充実した機能を活用していただきたい。図書館に

は市民一人当たり700円くらいの経費がかかっているのですが、その価値を十分に感じていただければと考えている。

委員 以前、保育園や小学校低学年向けの読み聞かせに関わっていた。中高生になると、疑問を持つことや探究心を刺激することで再び本に戻っていく姿を見てきた。学校や市民センターなどで、図書館と連携しながら郷土のことなどを調べる学習の機会をつくることができれば、読書への興味が広がるのではないかと感じた。

事務局 これまで高校への働きかけは少なかったのですが、探究心を育てるきっかけづくりとして、今後は高校とも連携しながら図書館運営を進めてまいります。

委員 9ページの図書館利用状況の「利用習慣がない」という項目を見て驚いた。この状況をどう捉え、今後どのように改善していくのか伺う。

事務局 「利用習慣がない」には、「そもそも図書館に行ったことがない」、「一度は行ったが継続利用していない」の2種類がある。小学2年生では社会科学習として必ず図書館を訪れるが、その後個人的に利用するかどうかは様々な要因がある。利用習慣がない方が継続利用するようにすることは非常に難しいことと認識しており、まずは生活の中で困りごとがある方に、図書館が役立つ場であることを知っていただき、図書館の講座に参加していただくことや、市広報で毎月1ページ図書館情報を掲載し、催しの紹介や雑誌リユース（保存期間を過ぎた雑誌の提供）などを通じて、図書館に足を運ぶきっかけづくりを進めている。また、魅力ある図書館とは何かを職員で研究し、計画に反映していきたいと考えている。

委員 私には子どもが4人いるが、本好きと本嫌いがいる。娘が中学生の時は、学校で毎朝5分の朝読書があり、そこから本が好きになった。学校で毎朝、本に向かう時間というのは、生徒にとっても貴重な時間だったのではないかと思います。

また、高齢者サロンに移動図書館が来て貸出をしているのも良い取組だと思う。図書館には写真集や料理本など様々な本があるので、地域の方の興味に合わせた本を届けることも大切だと感じた。

事務局 移動図書館サービスについては、限られた人員と燃料費の中で、一関地域から藤沢地域まで巡回できるよう工夫している。令和9年度からは全地域を訪問する計画を立てており、まだ訪問できていない地区にもサービスを届けられるよう努めてまいります。

教育長 小中学校では、学校図書館の充実に力を入れており、予算を確保して整備を進めている。学校図書館ではバーコードで貸出ができ、市の図書館の本も学校

から借りられる仕組みになっている。朝の読書も意義があるが、教育振興基本計画の「言葉を大切に教育」の一環として、小学校では「玄海」という教材を朝や昼の時間に活用することを共通の取組としている。そのため、学校によっては読書の時間を別に確保することが難しい場合もある。中学校でも読書時間を設けている学校はあるが、朝の落ち着いた時間を学習準備に充てるため、計算などを行う場合もある。いずれにしても、小中学生のうちに読書習慣を身につけることが生涯学習につながるという考えのもと、学校図書館の活用を進めていきたいと思う。

委員 読み聞かせについて、幼稚園から小学校中学年くらいまでは特に効果があると聞く。図書館ボランティアや読み聞かせグループの活動状況について伺う。

事務局 各図書館で毎週土・日曜日に「おはなし会」を開催しており、多くは午前中に実施している。読書指導員（会計年度任用職員・司書資格者）や読書ボランティア（サークル活動）、退職教員の方々にご協力いただき、エプロンシアターや人形劇など、さまざまな方法で読み聞かせを行っている。対象は乳幼児から小学生までと幅広く、年齢に応じた内容で実施している。

また、絵本は「人生で3回読む」と言われ、1回目は生まれた時に読んでもらう。2回目は自分が親になったとき、3回目は老後と言われている。そのため、高齢者サークルへの出前おはなし会も計画に盛り込んでいる。図書館で「おはなし会」を開催している際には、ぜひ気軽に参加していただければと思う。

委員 学校に勤務していた頃は、ブックトークやビブリオバトルなどで図書館の方にお世話になった。小中学校では本に触れる機会が多い一方で、その上の年代になると「知る・学ぶ」ために図書館を利用することが減り、インターネットで済ませてしまうのが現状だと思う。そのため、基本理念にある「楽しめる図書館」という視点はとても重要で、今後の具体的な取組に期待している。

また、私自身が大人になってから読書に興味を持ったきっかけは、大人向けのブックトークの講話だった。紹介された本がとても面白く、講話後すぐに本屋へ行った。子どもには本と触れ合う機会が多い一方、大人にはそうした機会が少ないため、大人向けの企画は有効ではないかと感じる。

事務局 今後の計画に、大人向けブックトークなどの企画も取り入れていきたい。

(3) 社会教育の必要課題に対する共通取組について

資料3に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 地域では児童数が減少しており、地域の人たちは子どもたちの様子が見えず、学校とのつながりも感じにくくなっている。私自身は孫がいるため、発表会な

どで学校に行く機会があるが、子どもがいない家庭では学校に足を運ぶ機会がなくなっているように感じる。旧松川小学校の時は、子どものいない家庭にも毎月「学校だより」を配布しており、地域の方々も学校の活動を知ることができた。今は、そのような取組はなくなり、地域の人たちは学校の情報に触れる機会がほとんどなくなった。その結果、地域の人たちは「どう関わればいいのか」「何をすればいいのか」が分からない状況になっているのではないかと思う。保護者だけでなく、地域の方々にも学校に来てもらえるような機会をつくり、声をかけていただくと良いのではないかと感じている。

事務局 市民センターの方々からも、子ども向けの事業を企画しても、そもそも子どもが少なく集まりにくいという声を聞いている。今後は学校と連携しながら、地域を担う人材育成の観点からも協力して取り組んでいきたいと考えている。学校教育課とも情報共有しながら対応していく。

教育長 学校と地域の関わりについては、学校には「学校運営支援協議会（コミュニティ・スクール）」があり、地域・学校・保護者が集まり、学校と地域の関わり方について話し合う場がある。今回のご意見も、そうした場で話題として提供できるよう働きかけたいと思う。

また、学校からの情報発信はデジタル化が進み、ホームページやスマートフォンへの配信が増えている。紙での全戸配布は難しくなっているが、地域の方にもホームページを見ていただくなど、情報に触れる機会を広げる必要があると考えている。

社会教育の観点では、市民センターや地域協働体と連携し、学校だけでなく地域全体で子どもたちの育成や地域理解を進めることが重要である。いただいたご意見は学校側にも伝え、今後の社会教育の参考にさせていただく。

委員 地域の郷土愛や次世代の人材育成という観点から、学校と地域のつながりはとても重要だと感じている。先日の学習発表会では、市民センター所長の話や、地域の昔話に詳しい方の話を子どもたちが聞き、その内容をもとに担任が台本を作成した。発表会では、地域の昔話や子どもたちの学びの様子を、保護者や地域の方々に披露することができた。こうした取組を通して、子どもたちが自分の郷土や地域について理解を深める良い機会になったと思う。

また、学校からの通信はホームページでの発信が多く、家庭を通じて祖父母などにも情報が広がっていると感じる。

地域とのつながりづくりとしては、市民センターを通じて地域の方に学校へ来ていただく事業もある。昨年度は4年生を対象に約30名の地域の方が参加し、

高齢者の方と子どもたちがパソコンの操作を教え合う活動を行った。児童も高齢者の方も生き生きと交流しており、「来年も参加したい」と言ってくださる方もいた。帰り際に涙ぐむ方もおり、こうした交流の大切さを改めて実感した。

このように、地域と連携した活動を継続して行っている。

委員 お子さんが学校に通っている家庭には情報が届きやすいと思うが、先ほどの話にあったように、子どもや孫がいなくなった家庭には学校の情報が届きにくくなっている。現在はデジタルでの発信が中心だが、アナログ世代には少し大変だと思う。地域では行政区長さんを通じて回覧板が回っているので、その仕組みを活用することで全戸に確実に情報が届く。例えば1学期に1回でも良いので、写真が数枚あるだけでも学校の様子が伝わるし、地域への情報共有という意味でも有効ではないかと思う。こうした方法も検討していただけると嬉しい。

委員 地域活動は参加者が固定化・高齢化しており、PTAなど学校関係ではつながりができても、その先の地域活動につながりにくい状況がある。子育て世代は忙しく、地域に関わりたい気持ちがあっても時間が取れず、婦人会としても役員のメリットが見えにくく、担い手がなかなか集まらない。昔は女性が外で働くことが少なく、農作業やお茶を飲みながらする話を通じて自然に地域に関わることができた。しかし、今は働きながら個々の生活が成り立ち、地域との関わりがなくても困らないため、つながりが生まれにくくなっている。こうした状況の中で、どう次の世代へ地域のつながりを引き継いでいくかが大きな課題だと思う。

婦人会は、地域づくりの担い手として力を発揮できる組織だと思っているが、若い世代がなかなか入ってこないのが現状である。女性たちが地域に関わる気持ちを持てれば、男性にも広がり、多様な人への思いやりも育つはずだと考えている。どうすれば参加してもらえるか、婦人会としても模索している。市民センターの活動などを通じて、若い世代にも「地域をつくる責任がある」という意識を育てることが必要だと感じている。婦人会としては、役員の成り手不足も深刻で、早く次の世代にバトンを渡したいという思いがある。市民センターとも相談しながら、様々な活動を試みているが、忙しい世代が参加しづらい現状に不安もある。子育てを終えた世代でも参加しやすい仕組みができれば、地域のつながりが広がり、隣近所を気にかける人も増えるのではないかと思う。

事務局 地域活動の課題については、さまざまな場面で同じような問題が指摘されており、今お話しいただいた内容もその通りだと感じている。一関市では、現在

33の地域協働体を核として地域活動を進めている。今年度からは「集落支援員」という新たな役職の方を各地域協働体に配置し、地域の課題を拾い上げ、まずは地域で話し合いながら「何ができるのか」「何を整理すべきか」を検討する取組を始めている。まだ半年ほどだが、今お話しいただいたような地域の課題が見え始め、これから取り組んでいく状況である。

まちづくり推進部には社会教育主事の資格を持つ職員が2人おり、市民センターでは社会教育士の育成も進めている。こうした人材が連携しながら取り組むことで、すべてを一度に解決することは難しくても、少しずつ前進できると考えている。

学校との連携についても重要だと認識しており、いただいたご意見を参考にしながら、今後の取組に生かしていきたいと思う。

委員 3ページの7の青年教育の「地域行事への参画」に強い関心を持っている。現在、中学校や高校でクラブ活動に入らない子どもたちについて、保護者から相談もあるが、地域で行事を企画してボランティアを募集すると、意外と多くの若者が集まってくれる。若者もまだまだ捨てたものではないと感じている。「地域の人材育成」という言葉は立派だが、1～2年で育つものではない。だからこそ、何かやりたい、でも人手が足りない、どうしようと悩むのではなく、前向きに地域の学校や高校にボランティアを呼びかけてみるのが大切だと思う。実際に募集してみると、地域行事へ若者が集まり、私たちでは思いつかないような発想で活動を進めてくれることもあり、成功につながっている。

10 担当課 まちづくり推進部いきがづくり課